

広島大学総合科学部報



“飛 翔”

No. 33

1987年12月18日



広島大学総合科学部広報委員会

目 次

学部長 就任の挨拶	天野 實	1
昭和62年10月2日以後の経過	天野 實	2
広島大学公開説明会		
そして故岡本先生が高校生に語ったこと	編 集 部	3
昭和62年度総合科学部		
1年生合宿研修行事報告	編 集 部	5
新任紹介 その1・阿部教官、Rinnert 教官		9
過密状態の総科	編 集 部	10
新任紹介 その2・Ruh教官、蘇教官		12
走りだした外国語コース	編 集 部	13
新任紹介 その3・杉浦教官、鈴木教官		15
黄色い柵、その後	編 集 部	16
新任紹介 その4・小川教官、Lazarin 教官		18
就職の話	編 集 部	19
新任紹介 その5・Goldsbury 教官		21
シリーズ 数字 その9	編 集 部	22
新任紹介 その6・橋原教官、山尾教官		23
「飛翔に関するアンケート」集計報告	編 集 部	24
街の総科	編 集 部	28
学部の記録		29
編集後記	編 集 部	32

最近の心境



岡本先生が亡くなられて早や4ヶ月が過ぎました。社会に対してまた、広島大学の他部局に対して大変御迷惑をおかけしたことを本当に申し訳なく心からおわびしなければなりません。今総合科学部は最悪の事態に至っており、

私達として今何をなすべきか、真剣に苦慮している次第です。事件の真相は公判により明らかになることでしょうか、私達としては総合科学部創設の理念、原点に思いを馳せ、今後ますます学部の発展に努力する以外に道はないと思います。総合科学部が如何にすばらしい理想をかかげ、多大の苦難の末に作られたかは今更述べる必要はないと思います。創設以来13年、どのような努力がなされて来たかも私達総合科学部の構成員が最もよく知っており、またそのことを誇りに思っています。非常に苦しい立場にある総合科学部の構成員である私達のなすべき事として特別な方策があるとは思えません。いままで通り各々の責務を今迄以上に遂行することが総合科学部を愛した岡本先生に対する最善の供養になると思います。

総合科学部創設に絶大なる御努力を頂いた、国立教育会館長井内慶次郎先生と御会いした時「我々凡人は肩肘張って生活すると、傲慢になるか卑屈になり易い。自然体でなすべきことを一步一步着実に実行することが大切である。」と話されました。総合科学部を愛し、将来の発展を見守って下さる先生の現在の私達に対する御忠告と有難く受取りました。

とはいえ私はやはり凡人で他人の目が気になります。毎日毎日、好きな歌の一節を思い出し、口ずさんでおります。

Wo ich gehe? Wo ich stehe?

Lachen die Menschen mir zu!

総合科学部の皆さんが力を合せて頑張ればきっとこの難局を乗り越えて立派な学部を作り得るものと確信しています。と思う反面何故こんなことになったのだろうか、何が欠けていたのだろうか、何が今必要なのだろうかと繰返し繰返し反省している毎日です。

今から5年前、一般教育研究会が広島で開催された時に前述の井内先生が特別講演をされました。そ

総合科学部長 天野 實

の中で曾野綾子さんが当時文部次官であった井内先生に話されたことの一節が何故か非常に強く印象に残っております。改めて読み直し(メタセコイア 16)、色々なことを考えさせられたのでここに引用し結びのことばにさせていただきます。

「今日お話しましたように、私は文学を通じて人間のむしろ弱いところか醜いところか、しかし真実を追求するということを文学を通してやっております。文学を通じて人間を描き続けていて、しみじみ思うことがあります。それは、人間も生物だ、動物だということをしみじみ思います。そして、人間を文学で追究していて、生物、動物全体に通じて言えることは、自己保存本能、自分にとって快いこと、自分にとってプラスになること、それは、生物全体は必然その方向に走り向うものだと思います。自分にとって明らかにマイナスである。自分にとって損である。自分にとつ或は命まで賭けなければならぬリスクを敢えて負う。そのような自ら損なことを決断し、それを実行しうる能力は私は人間にしかないと思います。その能力は、自然に人間を放り出しておいてできるものなのか、或はそういう能力は、人間社会において努力によって身に付くものなのか、その点は如何なものでしょうか。自分にとって損なことを成し得る能力が、どの程度身に付いておるかということが、教育の隆衰を判断する基準ではないでしょうか。そのような観点で考えますならば、文部次官を前において恐縮だけでも、今日の我が国の教育界は榮えつつあるのか、ひた落ちに落ちつつあるのか、極めて疑問でございます。」

昭和62年10月2日以後の経過

天 野 實

- 昭和62年10月2日 広島県警捜査本部発表
「広島大学構内における総合科学部長殺人事件捜査本部は、連日捜査を続行していたが、本日被疑者の犯行であることを突き止め、被疑者を通常逮捕した。
被疑者：広島大学総合科学部 助手 末光 博」
- 10月2日 臨時部局長連絡会議で説明
学長記者会見、総合科学部長記者会見
- 10月13日 部局長連絡会議、評議会で説明
- 10月14日 総合科学部教授会で説明
- 10月15日 学長の告示（別紙1）
- 10月22日 広島地方検察庁が起訴
- 10月23日 臨時総合科学部人事教授会開催
「起訴による休職を決定」
- 11月2日 臨時総合科学部教授会で説明
臨時総合科学部人事教授会開催
「懲戒免職を承認」
- 11月5日 臨時部局長連絡会議開催
臨時評議会開催 「懲戒処分の審査をすることに決定」
- 11月25日 「懲戒免職処分を決定」

（別紙1）

教職員・学生の皆様へ

岡本学部長刺殺事件発生以来、大学としては捜査に協力してきましたが、去る10月2日日本学の助手が容疑者として逮捕されたので、警察とも協議した結果、今後、学内における従来のような捜査活動は打ち切られることになりました。

この間、事件解決のために多くの方々のご協力をいただきましたことに対して、心から感謝いたします。

学内が再び本来の平静な状態に立ちかえり、いっそう充実した教育・研究が行われますよう切望します。

昭和62年10月15日

広島大学長 沖原 豊

広島大学公開説明会

そして故岡本先生が高校生に語ったこと

編集部

去る7月21日、広島厚生年金会館で高校2年生を対象とする広島大学の公開説明会が開催された。ここ数年の大学改革の動きの中で、その対応に追われる受験生と大学側が、双方手探りで何とか探し当てた方策の1つ、といういい方もあながち的外れとは言えまい。広島大学が、今年度入試で多くの入学辞退者を出し、追加合格の措置を講ずるなど、「慌ただしい春」を過ぎたことは記憶に新しい。

それでも、大学側から、来年度受験の3年生に対してではなく、これから自分の進路について真剣に考え始めようとしている2年生に対して（地元の高校生に限られているとはいえ）このような働きかけがなされたということは、それなりに評価すべきことであろう。来年以降も、より一層の内容の充実を図り、このような説明会が続けられていくことを期待したい。

さて、当の説明会であるが、午前は文科系、午後には理科系の各学部が、実際の内容や就職状況について説明を行った。総合科学部は言うまでもなく午前と午後の2回に登場し、いわゆる理科系の4コースは故岡本前学部長が、文科系3コースについては地域文化コースの志邨教官が紹介を行った。会場での質疑応答の後、各学部の見学も実施された。

「広島大学で何が学べるか」をテーマに開催された説明会であったが、総合科学部の場合どうしても学部創設の理念、あるいは特色について触れざるを得ない。例えば志邨教官は文科系3コースの具体的な説明の前に、この学部の若さや、専門の壁を打ち破っての学問の統合が要請されている社会的な状況について語り、総合科学部が求めている学生は「現代の諸問題に対していろいろと関心を持っている」学生、あるいは「何か自分に出来そうだ、何かをやりたいのだけれど、何をやればいいのか今はわからない」学生だという。1年終わりのコース決定迄にいろんなことを考え、それからやりたいことをつかめばいい、ということである。これまでの総合科学部生の多くが、ここに魅かれてやって来た。

この公開説明会の余韻も消えないうちに、岡本先生は急逝された。周知のように事件は一応の結末を迎えたが、岡本先生の公式の場での恐らく最後の言葉となったこの説明会での話を、追悼の意を含め、ここに掲載しておく。

尚、文章は、公開説明会のビデオからおこし、編集部の責任において読み易いように多少整理したものであることをお断りしておく。

（文責 新迫明美、藤本貴子）

こんにちは、私の学部、総合科学部のことについて説明しようと思います。私の学部では、このようなパンフレット（無限への挑戦）を作成しております。今日後で大学の方に来られた時にお渡しすることにしてありますが、手にとって、進路指導の先生とよく相談しながら見て下さい。

さて、配布した資料を見ていただければ大体わかりますけれども、私の学部は文科系と理科系に分かれております。

理科系には、数理情報、物質生命、自然環境、生体行動という4つのコースがございます。入ってくる時には文科系でも理科系でもよろしいんですが、中に入っているいろいろ勉強して、自分の適性をみた上で、1年後に、一番自分に適したところに進むことができるようになっております。

ところで、自然科学系には、理学部と工学部がありますが、私の学部はその2つの間を行くんです。皆さんは、物理・化学・生物・地学を習っておられますけれど、私の学部の4つのコースは、それを基本にししながら、例えば物理と生物の間、化学や生物の間、というような研究をしていくんです。このような学部は、最近非常に増えつつあります。つまり学問的には非常に幅広くやらねばならない。従来の学問の形というのを「吊り鐘型」と言っていますが、我々の学部は、一番下の学問体系をずっと広くしておいて、そこからだんだんと自分の専門にもっていくという形です。だから私の学部に来たならば、他所の学部より一層沢山勉強しなければならないということは覚悟しておいて下さい。諸君も新聞やテレビでご存知でしょうが、最先端技術というのは、どちらの方向に芽を出していくのか分らない。そういうことにも、いろんなことを幅広くやっっていくことで対処できるようにしておる学部です。では、自然科学系のそれぞれのコースについて説明していきます。

数理情報というのがあります。現在のコンピューターは非常に発達しておりますが、それをどうやって使うかが問題となってきます。これからは、数学的な頭に入れておかないとプログラムを組むことが出来ないんです。自然科学を充分マスターしておくと、1つのデータを見ても、それがどういう形で考えられておるのか、ということが分かるようになる。このコースの学生は、メーカーのコントロールを行っている部門やソフトウェアの会社に行っておるようです。

次に、物質生命科学コースですが、これは、現代の最先端に行くようなエレクトロニクスとか、新素材の開発から始まって、バイオテクノロジー等を利用して、高度な情報化社会の原動力となるようなものを作り出すことを1つの目的としています。また、物質というものは、生体という非常に巧みなメカニズムを形作っている。この人間の生体というものを十分に研究した上で、それに応じた新しい物質を考えていくこともこのコースの目的です。このコースを卒業した学生は、製薬会社のような生物・化学の関連会社、エネルギー関係、あるいは医療機器等の方面に進んでおります。

第3番目は自然環境コースでございます。これは現在諸君をとりまいておる自然の状態というものが、どのようにして君達の環境を守っておるかについて研究した上で、我々が住みよい環境で生活するにはどうやったら良いかを学問研究するものでございます。で、ここを卒業した学生は、電気通信関係、住宅公団、農林省、気象庁などに進んでおります。

最後に生体行動科学コース。これは、人間の脳の活動やホルモンの分泌等の生理状態と、人間の心理状態との関係というものを研究する学問分野で、日本ではまだ目覚めていない分野なんですけれども、外国では心理学系統の最先端として今進められております。ここの卒業生は、各種企業の人事等、人間の管理に関わりのある部門とか、公務員でしたら行政や社会福祉関係の仕事に就くようでございます。

私の学部には、二百数十名の教官がおります。1学年170名程度です。自然科学系の博士は全部揃っておる。だから、あらゆるものを勉強しようとするならば、私の学部に来れば大体わかる、というわけでございます。私の学部には、「頭のいい」学生はいらないんで、むしろ「新しいものを作ってやろう」という学生が欲しいんです。そんな学生にどうやって来てもらうか、これは私も考えているところですが、まあ、入ったらしっかり勉強してもらわなければならないというのは事実でございます。また、つけ加えておけば、私の学部は（広島大学の一般教育も担当しているので）君達が入学してきて最初の1.2年くらいは、総合科学部の学生でなくても、うちの学部の教官の講義を受けることになる、という学部でございます。

昭和62年度総合科学部一年次生合宿研修行事報告

編集部

去る10月24(土)、25(日)日、広島工業大学沼田研修所において、総科62生に対するコースガイダンスのため合宿研修が実施された。参加者は、総科62生120名、教官18名、事務官6名であった。以下は、その行事内容に関する報告である。

まず、この合宿研修の性質を知るために、「合宿研修のしおり」の「あいさつ」の文を紹介しておく。

『今回行なわれる沼田研修は、一昨年迄は西条研修として、一年次の五月末に実施されてきました。しかし、昨年は入学定員増加に伴って、西条の研修施設では人員の収容ができなくなり、このような研修行事は実施されませんでした。その結果、61の先輩方が学部側に「こういったコース説明の研修はコース決定に大変役立つものだから」と直訴し、また学部側も研修の必要性を感じたため、今年また再出発したのです。いわば、この合宿は、教官の方々、事務の方々、61の先輩方、62の学生委員、そして参加者全員よりなる、総合科学部全体でつくり上げた研修なのです。

この研修の一番の目的は、今までなされてきた形式的なコース説明ではなく、もっと掘り下げたところ、例えば、教官方は実際どのような研究をしていらっしゃるか、上級年での学習内容、卒業論文のテーマ、就職状況などによって、具体的に一つ一つのコースを知ることにあります。7コース編成になり資料の不足するコースもありますが、それを補えるように各コースに多面的なアプローチを試みています。そして又、教官方と直接対話できる場も用意されています。

「— 私はこの機会に、諸君に“対話のすすめ”を提案したい。そして対話を通じて相手の話を徹底して聞く、いわゆる“聞き上手”になって欲しい。人の言葉をよく聞いて、その人の心を正しくとらえることができれば、次に自分の気持ちを正確に伝える“話し上手”になる方法もわかってくる。ここに人間相互の信頼と協調が生まれる。そして対話を大切にすることで、暖かい人間関係をつくる意義をかみしめて欲しい。

従って、“対話のすすめ”は良い友を作ることに役立つ。良い友人を持つには、まず自分が相手を

理解し相手の良き友とならなければならないが、それを可能にしてくれるのが対話であろう。そして対話を通じてお互いの美しい心を伝えあって欲しい。我々にとって、貴重な人と人とのふれあいはこうして生まれる。合宿はそういう機会を諸君に与えてくれるだろう。—」

以上は、一昨年の研修のしおりの冒頭で述べられた故岡本哲彦前学部長のお言葉です。この研修を“聞く”だけの研修に終わらせないで下さい。多くの人と“話す”ことをして下さい。御生前、この合宿研修再開のために各方面に働きかけて下さった前学部長の言葉を胸に、この二日間で明日につながる何かの糧となるよう、参加者一人ひとりがこの合宿研修を築きあげていきましょう。

62学生委員一同 』

この文章で、今回の合宿研修の性質が理解できると思う。次に合宿研修内で実施された行事についての報告をする。

参加教官

天野 實学部長	久保 泉教官	檜原忠幹教官
上里一郎教官	生和秀敏教官	福嶋正純教官
磯道義典教官	武森重樹教官	舟場正富教官
伊藤詔子教官	田村和之教官	堀越孝雄教官
川辺信雄教官	内藤陽哉教官	間瀬 茂教官
菊地邦雄教官	根平邦人教官	宗岡洋二郎教官

I 全体ミーティング(24日14:30~16:30)

約1時間かけて、広工大沼田研修所に着き、すぐ参加者全員が大講義室に集合し、全体ミーティングがはじまった。

最初の学部長挨拶で天野学部長は、故岡本前学部長の事件でのマスコミの誤った報道、特に現在総合科学部がとっている大講座制について説明された。この事件のため、当初参加予定されていた教官に変更があったことや、私達が広島大学総合科学部生であるということから、この事件について教官側から何のコメントもなかったのは、やや不満であったので、学部長のこのコメントは意義深かった。また学部長は、総合科学部生として、専門を越えた友人をつくることをすすめ、そして、「何かをやってやる

う」という意志をもって、学生が学部を活発化していくべきだと述べられた。

次に7コースの説明があったが、事前に学生が、「7コースの説明は従来の形式的な説明はやめてほしい」と要望をだしていたため、どの教官も、各自の研究内容の説明を織り交ぜたりして、興味ある説明をして下さった。しかしこのコース説明を聴き、7コースとして本格的に始動するのが来年四月からということで、新コースについては講座や担当教官の割り振り等について、現時点では未だはっきりしない部分も多分にあるという印象を受けた。それは同時に、私たち62生が新しい総合科学部をつくる第一歩とならなければならないことを感じさせた。そういう意味からも、各教官方が強調された「より学際的な研究をすすめようとする姿勢」を大切にしていかなければならないだろう。また、この7コースの説明での自然環境コースの説明をされた堀越教官の「私はブナ林が好きです」の一言は、多くの人に「やはり、自分の好きなコトが研究対象となる(あるいは研究対象を好きになる)ことは、幸せなことだ」ということを思わせただろう。

最後にこの沼田研修のオリエンテーションがあり全体ミーティングは終了した。

II 班別ミーティング(24日18:30~20:10)

この班別ミーティングは、学生を希望コース別の班に分け、コース関連の教官を交えて、フリーディスカッションをやるものだった。これは、今回の合宿研修のMainといえる行事で、教官とInformalな対話をして、より詳しくそのコースを知ろうというものだった。基本的には各コース内でも2班に分かれ10人前後の班を14班つくったが、コースによっては1班にまとまってディスカッションをすすめたコースもあった。どの班も最初はあまり発言がなかったが、最終的にはかなりもりあがり、どの学生も満足できたように思われる。それは、10月という時期で学生側は、ある程度希望コースが決まり、そのコース内での研究領域、卒論内容、就職等に興味を持ちだしたということがいえるからだろう。また、班によっては、事前に学生にアンケートをとり、疑問点を具体化しておいたこともよかったといえる。班によっては時間のたりない班もあったようなので、時間がとれるのであれば、この行事は、学生側にはとてもためになったと思うので、時間をもっと増やしてもよかったのではないかなと思う。

III 文系、理系別ミーティング(25日9:00~11:00)

これは、文系コース(地文・社会学・外語)、理系コース(数理・物生・環境・生体)に別れて、班別ミーティングでの疑問点をなくすという目的のミーティングだった。

a 文系ミーティング

教官 福島教官(地域文化)
川辺教官(")
舟場教官(社会科学)
田村教官(")
伊藤教官(外国語)

先ず、前日の班別ミーティングの報告が各班の司会者から行われた。報告では、個人個人のそれまでの疑問をこの班別ミーティングで大部分解消できたという意見が目立ち、教官と身近に接して話す機会がもてたことも合わせ、どの班も充実した話し合いだったようだ。

次に教官側から班別ミーティングに関する補足があった。伊藤教官から外国語コースについての詳しい説明があり、舟場教官からも前日の晩、説明が不十分だったということで、単位やゼミ選択についての説明があった。その後、文系ミーティングの一番のねらいであった質疑応答が行われた。その内容は、ゼミナールとは具体的にどのようなものか、といったものから、マスコミ関係への就職は地域文化コースと社会科学コースのどちらが有利かといった現実的なもの、さらには、言語理論学とは、社会動態論とは、というような学問の内容を問うものまで、かなり幅広い質問が出された。そしてその質問一つ一つに複数の教官方から丁寧で詳しい回答が与えられ、班別ミーティングでは充分でなかった多コース的視点を得た。コース選択でいろいろ迷っている学生には、かなりの助けになったであろう。また、教官方の話に奮い立たされ、やる気になった学生も多いのではないかなと思う。こうして文系ミーティングはかなり中身の濃い時間となった。



b 理系ミーティング

教官 久保教官(数理情報)
間瀬教官(")
磯道教官(")
檜原教官(物質生命)
宗岡教官(")
根平教官(自然環境)
堀越教官(")
上里教官(生体行動)
生和教官(")
菊地教官(")

事前に班別ミーティングでの疑問点を、各班の司会者が集まって出しておいた。最初にこの疑問点を各教官に答えてもらった。これらの疑問点は、研究室の選び方、卒論のテーマの決め方、コース内での群の分かれ方等、どのコースにも共通するものばかりで、具体的な問題は班別ミーティングでかなり解消されたものと思われる。実際、これらの疑問点を教官方に答えてもらった後、質疑応答に移ったが、学問の内容を問う質問等はなく、これは具体的な研究テーマに関しての質疑応答が行われた文系ミーティングとは対照的である。しかし、発言者が6名程だったのは、前日既に疑問が解消されたとみるべきなのか、発言を控えていたとみるべきなのかは、問題であると思う。せっかく多数の教官に直接質問できる場であったのだから、もっと発言者が多くても良かったのではないだろうか。このことは、ミーティングの最中に上里教官からも指摘があったが、それでも発言者は増えなかった。

しかし、この理系ミーティングで良かったことは「教官は総科の理念である『学際的』ということについて、どう考えているか」という質問に対して、各教官が熱心に答えて下さったことである。事実この答えに約1時間かかった。教官方の意見で目立ったのは、いくら学際的といっても、一つの分野に深く根をおろしていなければ学際的な研究などできないということだった。つまり学生にとっては、在学中は学際的な研究は難しいということである。そして総科生として学際的な研究をするには、他学部生よりも倍の勉強をしなければならないということだ。また教官方は、総合科学部では専門外の分野の人達とも交流がしやすく、複眼的なアプローチもしやすいことから、学際的な研究ができる可能性が大きいということも述べられた。

以上が理系ミーティングの報告だが、この研修で

はあまりにも1コースを知ることによって重点がおかれていて、総合科学部が一学部一学科ということをお忘れがちであったので、このミーティングの最後にてた、学際的ということは、総合科学部を見なおすという点で非常に意味のあるものになったであろう。

Ⅳ レクリエーション(25日13:00~15:00)

学生には事前にソフトボールとバレーボールのどちらがやりたいかという希望調査を行い、それぞれチームをつくっておき、教官・事務の方々には自由に参加してもらい実施した。ソフト・バレーともに、菊地教官の「楽しく、ケガ人もなく」の言葉通りでき、問題はなかっただろう。

Ⅴ 懇親会(24日20:30~22:00)

いわゆるコンパで、立食パーティーという形式をとった。学生が教官とフリーに対話できるようになっていたが、積極的に教官のところに行く学生は少なかったようだ。途中、マイケルジャクソンの仮装など学生の企画物もあり、学生は楽しめたようだったが、教官にはついていけない面もあったようだ。これによって会場全体がかなりのもりあがりを見せたので、企画者たちは満足だっただろう。しかし、学生と教官の対話が少なかったのは残念なことである。

Ⅵ 資料展示

沼田研修所滞在期間中、ホールを借りて、コースのカリキュラム、教官の研究テーマ、卒論の題目、就職状況、各コースの発行物という資料を、学生が自由に閲覧できるようになっていた。

これらの資料は事前に、教官・事務・学生で収集整理したもので、量的には必ずしも多いとはいえなかったが、学生、そして教官にも好評だった。特に総科の全教官にアンケートをしていただき作成した教官の現在の研究テーマ、将来やりたいと思っている研究テーマ、要望する学生、研究室の紹介等の内容の資料は、実際に教官が何をしていらっしゃるかを知るのに大変役立った。それも、アンケートの回収率もよく、しかも熱心に答えて下さったから貴重な資料となり得たのだろう。このアンケート資料はこれからも活用できる資料なので、多くの学生が活用できるようにして欲しい。飛翔としても、この資料を今後何らかの形で扱いたいと思っている。

Ⅶ 総括

今回の合宿では合わせて3つのミーティング(全体・班別・文理別)が行われた。全体ミーティングをのぞいては、希望コースごとの班編成、あるいは文理別などといった、コース別を意識しすぎる面が目立ったようだが、このことはコースをはっきり決めかねている学生にとっては多少難があったかも知れない。「学際性」を売りものにする総合科学部としては、もう少しコース間の壁を低くした構成を考え、「総合科学科」という1学科としての帰属意識を強調するべきであった。

また、それに関連して、文系より理系の方に制約が多く(要望・指定科目など)、どうしても研究内容が分化しがちであることが問題点として浮かび、理系ミーティングでは専ら「学際性」について議論が交わされたのに対して、文系ミーティングではコースごとの、或いは個人の持つテーマについて、など個々のやりとりが多かったのは興味深いことである。

次に、合宿の行われた時期であるが、学生・教官を問わず、どうしても“先輩指導型”になる一昨年までの5月よりは、学生間の交流が深まって、1年生が自主的に行動できる10月前後で良しとする向きが多かった。

広大では4月に全学のオリエンテーションキャンプもあり、総科の研修合宿は親睦を深めることよりも、各自の進路を真剣に考え、より詳しい情報を得る機会としてとらえるべきであろう。ただ、議論をしてゆくうちに自分の持つ意欲の方向がわかるというケースや、これまで考えていたコースを変更する場合もあることから、後期の聴講手続期間よりも早めに行うべきだという意見も多かった。

さらに、希望コースの予備調査をする前に、という意見もあったが、予備調査をすることでプレッシャーがかかり、問題意識が高まったところで研修を行う、という点はむしろプラス面であったと思われる。

一方、全体ミーティングでは、これまでも行われたコース説明会とは違った、各教官の個性を出したものにするため“10分間レクチャー”の方式をとったが、それでも「これまでのガイダンスと変わりが

ない」「(全体の)時間が長すぎる」などの批判もきかれ、学生側の反応は必ずしも喜ばしいものではなかったようである。この背後には、例年に比べてガイダンスが多過ぎる、9月にも説明会を行ったばかりだ、というようなこともあり、今後の検討課題となるであろう。教官側からの「説明」よりも学生側の自主的な「下調べ」に重点をおくことで、はじめてコースや総科に関する疑問点が各自のものとして具体化するのではないだろうか。

また、今回の合宿での大きな問題点のひとつに、学生同士の対話が少なかったということが挙げられるが、3つのミーティング中で班別ミーティングが最も成果があったという報告からも分かるように、小単位のミーティングを数多く行うということも考えた方がよさそうである。むしろ、班別ミーティングなども、教官をつけずに学生だけで自由に話し合う形をとった方が、より発言がしやすく、卒直に意見の交換ができたのではなかっただろうか。コース選びには、あくまでも学生自らのはたらきかけを期待したい。

さらに今後の参考として、教官の立場からだけでなく、3・4年生や院生にも合宿に参加していただいて、同じ学生としての体験談や生の意見をきけるようにする、というのも一案である。院生に、というのは、大学院のない分野もあり、足並みをそろえるにはしばらくの時間が必要であるが、「教官は、毎年毎年同じことを新入生に説明しなくてはならない」といった状態を脱するには適当であろう。また、総科は他の学科と比べて人数が多いため、どうしても先輩・後輩の縦のつながりが稀薄になりがちであるが、こういった機会に学問の話を通じて先輩方と親しくなれば、という要望も多く聞かれた。

今回の合宿は一応の成功を収めたが、以上の様々な問題点、反省点をふまえて、来年も一層充実した研修合宿が行えることを期待したい。

最後に、準備の段階からたいへんお世話になった学活委員会を中心とした先生方、並びに事務の方々、そして当日参加して下さった多くの先生方に感謝の辞を述べて、これを62生合宿研修の報告と反省のしめくりとする。

(文責 1年編集委員一同)



1970年代の中頃、オハイオ州立大学大学院の文化人類学M.A.コースを終了し、Ph.D.へ進むため、Michigan State, The Univ. of Virginia と The Univ. of Kansas に応募しました。

Michigan State からオハイオ州立大学にいられていた台湾出身のChen教授より、当時、Michigan State でChairmanをされていたGallin 教授を紹介していただき、Ohio のColumbus より Greyhound で面接に行きました。そのあつすぐ、今度は、Virginia のCharlottesville にあるThe Univ. of Virginia でChairmanをされていたWagner 教授との面接にも行って来ました。しかし、The Univ. of Kansas とは手紙だけでした。

数カ月して、Michigan State からはだめだとの返事を受取りましたが、Kansas からは入学許可の返事が届きました。Kansas で勉強を始めてすぐにVirginiaから来てよいとの連絡がありましたが、そのままKansas でやってみることにしました。

Kansas に入学した1976年だったと思いますが、その当時広大におられたM先生より、英語の先生を公募しているので応募してみてもどうかとの手紙をいただきました。何日か考へて、寮に帰る坂道を登りながら、まだまだ自分には力がないので応募はしない決心をし、先生にお返事を差し上げたことをはっきりと今でも覚えています。

あれから、10年後の現在、総合科学部に勤務するようになるとは思っていませんでしたが、トロントの学会では嶋先生にお会いし、Kansas のLawrence では坂本先生にお会いしたりするなど、偶然だとは思いますが、何か縁があったような気もしてなりません。

外国語コースでは、異文化間コミュニケーション論を担当することになっており、文化人類学の経験を活かしたらと願っています。この7月は、ハワイ大学の東西文化センターでの[Intercultural Communication Workshop]に参加して、大学で異文化間コミュニケーションのコースをどのようにして教えたらよいのかなどを話し合いました。

赴任して2カ月足らずで、まだ落ち着きません。先日、英語講座の先生方が歓迎会を開いていただき、ご出席の先生方より暖かく迎えていただき rite of incorporation のような感じがしました。これからもご指導の程よろしくお願い致します。
(外国語コース 英語)

キヤロル リナー
CAROL RINNERT



Although I was born in California, my home since 1974 has been Idaho, land of "famous potatoes" and beautiful mountains. After earning my Ph.D. degree in Linguistics at the State University of New York at Buffalo, I taught Linguistics and English, particularly English as a Second Language for foreign students and immigrants, at Boise State University in Idaho's state capital from 1974 to 1986.

I love to travel, and I have studied, lived and worked in several different countries. I spent my junior university year at the Sorbonne in Paris and my first year of graduate study in Grenoble, France. From the fall of 1982 to the summer of 1984 I was a Fulbright Lecturer in English at Sana'a University in the Yemen Arab Republic. I also taught English conversation and communication at the Language Institute of Japan, (LIOJ) in Odawara for nine months before coming to Hiroshima in April, 1987.

My husband, Richard Parker, is an architect and illustrator who specializes in passive solar, energy efficient residential buildings using natural materials and incorporating traditional styles into modern structures. We look forward to exploring traditional Japanese architecture and art together during our stay in Japan. Our other interests include playing billiards, cycling, hiking and listening to blues and folk music. I also enjoy all forms of dance, especially Middle Eastern, and am studying Japanese language and Ikebana.

(外国語コース 英語)

「過密状態の総科」

編集部



総科の建物には人間があふれ、すでに過密状態に陥っているのではないかという指摘がある。もちろん、総科は御承知のとおり総科生以外に一般教育科目を受講する他学部の学生も出入りしており、その点では広大で最もにぎやかな建物であるといえる。

しかし、あの人気講義での立ち見の学生の数、教室での席取り、果ては語学の教室の席が「全員出席すると足りない」だの、LJ教室の席が足りなくて普通教室に変更となり、結局カセットテープを使って各自家でヒアリングをすることになった、などという事態は、いかに「混み合った状態でも平気」といわれる日本人でも、多少の問題意識を感じることであろう。

私たちの世代が小学生の時分には、「ゆとりの教育」を目指して40人学級にしようとする運動が高揚していたという記憶があるが、いずれにせよ、私たちは、極度な過疎地出身者でなければ、物心ついたときから「人間で混み合った状態」に慣らされてきている（もっとも、最近児童数は減少の一途をたどり、他にも都市のドーナツ化などで人口、特に学生・生徒・児童数の問題を単純に論ずることは難しいのであるが）。つまり、ここで言いたいのは満員電車

に平気で乗れるかどうか、とかそういう極端な例ではなく、ぎゅうぎゅう詰めの講義の席で、隣りの人とヒジがぶつかったり、教科書やノートを重ねないと置くことができないにも拘らず、ヒステリーをおこしたり、不満をもらしたりすることのない、というよりできないような環境になってしまった、ということなのだ。

ところで、講義の場である教室以外の生活空間、つまり廊下、ロビー、ピロティなどはどうだろう。むしろ、こちらの方がより総科の人間の多さを実感させてくれるとあってよい。なぜなら、講義の時間以外では、たいてい人は黙ってじっと座っているということがないからだ。人間は生きている限り動く。話をする。そしてそれに見合った生活空間が必要であり、適度な静けさも必要だ。しかし、この総科の建物を見渡してどうだろう。さらに、そこから離れた（特に1年生の）学生研究室は、食堂は…？

このように考えてみると、私たちの大学での日常生活で、「人の数の圧迫」を感じる場合は、総科の建物内だけとは言えなくなる。（無論、他学部の校舎は、総科の校舎よりも人数と広さの割合ではるかにゆとりがあるという見方もできる。）そして、極端

に言えば、このような圧迫を感じ続ける以上、私たちは気付かぬうちに微量ながら連続的なストレスを受けつづけることになりかねない、というわけである。

それはともかく極端な例ということにして、もうひとつ気がついたのは、広大の構内には、とにかくベンチ、座って落ち着ける所が少ないということだ。イスなら教室に山ほどあるではないか、とおっしゃるかも知れないが、あのイスで、机で、ゆっくり座って弁当を食べたり話をしたりすることは、学生諸君にとって本当に満足であろうか？ どちらかと言えば、食堂は混んでいて前に座っていた人が食べ終わるのを待たなくては席もとれないくらいだし、学生研究室も居場所がないくらいの混雑で、他に座って落ち着ける場所がないから、仕方なく3コマ目の教室へでも……、ということなのではないだろうか。そして、人によっては、総科の建物の正面にある、あのコンクリートの仕切りのような所へ腰を下ろすことになるのである。

加えて、もうひとつの例に、図書館のイスの数がある。何千人もの学生をかかえていながら、試験期間は言うべきにもあらず、普段の日でも閲覧室はいっぱい、いっぱい、というのはイスのことではなく空間のことなのであるが、とても落ち着いて読書や勉強をするスペースがない。(それにあの書棚と書棚の間隔の狭さ。同じ筋に2人が立って、互いに左右の違う書棚を見ながらすれちがうときなど、実に窮屈である。)しかしこのようなことも、プロイラー式に教育を受けてきた世代には、別にどうということもないのであろうか。欲を言えば、まがりなりにも学問研究の最高峰たる「大学」の図書室にぐらいいは、そこに集う学生達が悠々と座れるだけのイスと空間があってほしいものなのであるが。

総科の建物の話がそれてしまったが、以上の“無駄な”愚痴を教字のうで確かめてみようと思う。確かめるといっても、総科の校舎の床面積を総科生と一般教育科目の受講人数で割るなどというところでもないことはやめて、乏しい資料の中から、一般教育科目の受講人数を調べてみた。年数が不足しているのはたいへん恐縮なのであるが、61年度の前期で他学部の2・3年生を含んだ総受講者数は、6,581人(院生21、総科生523、他学部生6,037)。そし

て62年度の前期で、6,916人(院生17、総科生589、他学部生6,310)であった。この資料から想像できるとおり、少なくとも毎年学生数は増加傾向にある。また今年度前期の最多受講科目の受講者数は704人で、この講義には教育学部大講義室が使われているが、ここの最大収容人数は500人なのである。では、残りの204人は何処へ消えるのか？ もちろん、毎回全員出席しそろうもないことを見越してのことであろうが、それにしても、ほとんど常に立ち見がいるという噂があるのは、誠に憂うべき事態である、と言わねばなるまい。

広大は漸次的に西条に移転し、将来は、上記の様な「過密問題」に悩まされることもなくなるのであろう。だが、総科は教養部であり、かつ、独自の学部生もかかえている故に、総科が移転する予定の昭和67年になるまでは、これまでと同じ状況下におかれると予想される。さらに、広大の募集定員が増加すれば、現在を上回る学生が総科の校舎に出入りすることになるであろう。現時点での学生は、広大の「過渡期」に在学したというだけの理由で“蟻のごとくに集まりて”窮屈な学生生活を余儀なくされる運命にあるのだ。将来入学してくる学生のためには立派な施設が用意されるが、過渡期の学生のためには、これといった過密対策は考え出されないのだろうか。

しかしながら、広大が、敷地が狭いくせに受験生をたくさん合格させてくれる「良心的な」大学であるということもまた、事実である。昔なつかしい受験の資料をめくりながら、広大総科の募集人員が、140人から170人に増やされているのを見て、(ひょっとして私はこの30人の中に入れるかもしれない)と、入試に明るい希望を見出したのを、思い出した。(文責 伊藤多喜子)

新任紹介 その2

少々の私

クリステイル ハンネローレ・ コジマ・ルー
CHRISTEL HANNELORE KOJIMA-RU



私は、1946年、ベルリンで生まれました。戦後間もなくの頃でしたから、壊滅状態の都市、瓦礫の山の中で生まれました。両親も私を育てるのに大変苦労したようです。まともな食物も住居もない当時でしたから。私が丁度14才の時、おば(母親の姉)の家に泊りがけで遊びにいっていた夜、今日の東西ベルリンの壁がつけられました。私は何とか、母の所へ戻れたのですが、それ以後私の親類は(特に母親の実家が東側にありましたので)、しばらく互に会うこともできない状態が続きました。物質には恵まれない幼年時代でしたが、ベルリンの森と湖を満喫しながら育ちました。少女時代、或る本の中に、ベトナム人だったと思いますが、頭に傘をかぶって野良仕事をしている絵があり、それを見た私は何故かよく分らないのですがとても感動し、それから極東アジアに興味を持ち始めたようです。ベルリン自由大学に入学してもすぐ、アジア研究を中心に学びました。大学での研究はきつかったですが、自由な空気の中で満足しておりました。ところが、ご存知の方もおられるかも知れませんが、私どもの研究所からドイツの大学学生運動が起り、たちまち他学部にも拡散し、研究室に足も踏み入れられなくなってしまいました。本が使えませんでしたので研究もできず、丁度香港から帰ってきた私は仕方なくベルリンを離れ、ヴュルツブルク大学へ変わりました。私自身は全く非政治的人間なのですが、私が上記大学へ移る時、こちらの研究所では、ベルリンの火元から学生が来るとのこと心配があったそうです。ヴュルツブルク大学は、日本ではあまり知られていないようですが、16世紀に創立された古い大学で、日本との関係で言えば、シーボルトがこの地で生れ学んでいます。またレントゲンがレントゲンを発見した大学でもあります。この大学を卒業してすぐ日本にやってきましたが、その後日本とドイツの間を行ったり来たりで、広島に地を定住して、今年で8年が過ぎました。日本とドイツの大学は、その歴史も、存在している意味もかなり違うようで、一概に比較できないようですので、ここでは触れません。私は、図書館の端で古書に囲まれながら読書に耽って暮らすのが理想なのです。(外国語コースドイツ語)

スー ドーチャン
蘇 徳昌



昭和10年10月、中国人の父と日本人の母の間に四男として生まれる。仙台市荒町小学校を卒業後、仙台市第二中学校に入学。昭和23年7月、中学を中退し、中国に戻る。或いは少年時代を日本で過ごしたせい、末だに日本の古寺やひなびた温泉・民家が好きである。東京の銀座や新宿歌舞伎町など、飲み屋の酒を除いてみな嫌いである。中国に帰ってからは、父に中国語を教えてもらい、上海市の江湾高校に入る。そして、昭和30年9月、北京大学理学部に入学。当時修業年限は5年であり、専攻は流体力学であった。専攻ゆえ、風洞の実験もやるべきであるが、私の父方と母方の親戚が台湾や日本にいたので、所謂秘密に属する実験室には入らせてもらえなかった。卒業後、北京大学の助手になったが、北方の気候と食物が肌に合わず、南方に戻り、昭和37年9月、上海市の復旦大学大学院に入る。専攻は数学の偏微分方程式であったが、実際卒業論文は空気力学関係のテーマであった。卒業後、同大学の助手になり、理学部数学教室に籍を置いていたが、文化大革命で、工場や農村を点々としてまわった。心身ともに鍛えられるところもなくはなかったが、相当苦労したのは事実である。特に、父が大学で槍玉に上げられ、私はまわりの人から白い目で見られた。そして、昭和51年、文革が終わり、やっと日の目を見ることができるようになった。その前の昭和46年、私は強制的に転向を命じられ、日本語教育に携わるようになり、中国史上はじめての上海市ラジオ日本語講座の講師も兼任する。私の書いた日本語の教科書は未熟なものであったが、85万部も売れたのにはびっくりした。日本語の文法・敬語及び日本文化の勉強をしながら仕事をやり、講師・助教授・教授となった。昭和53年、学術振興会の招聘で30年ぶりに来日。それから平均して年に1回来日、今回は第8回目である。9年の間の4年半は日本で過ごし、言葉も感覚も何かめっちゃくちゃになり、国際人でなく、変人になった感じがする。中国も日本も或いは私みたいな変わり者も必要としているのではないかと思いつつ、今まで歩いて来た道を最後まで歩き続けようとしているのが私の姿である。(外国語コース 中国語)